麻生路郎主幹

川柳雜誌

五月號

川柳雜誌第三卷第五號目次

感想・評論

卷頭言　麻生路郎
多忙篇　麻生路郎
川柳自在　竹馬居

研究・其他

唐柳短解　蛭子省二
口語體の句　麻生路郎
句評　塚崎松郎
同　林田馬行
同　井上刀三
旅に櫻　駒井美の作
新開地だより　萬よし生
私の知人の川柳觀　諸家
金澤へ　橋本二柳子
募集句　白石維想樓選
細引　朝陽・二柳子共選
蜂

創作

川柳塔　塚崎松郎
同　喜田飯山
同　岩崎柳路
同　黑木莢豆
同　松本助六
同　伊藤彥造
同　井上刀三
同　酒井駒人
同　林田馬行
同　森田輝翠
同　庄萬よし
同　太田朝陽
同　橋本二柳子
戀の句　林田馬行
近作柳樽　諸家

各地柳壇　會報　川柳家戸籍
調べ　編輯後記

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　大正十五年五月一日發行　大正十五年四月廿五日印刷納本（毎月一回一日發行）

川柳雑誌社同人

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　亀井花童子　藤本卯之助
伊藤彦造吉川啞人　駒井美の作
井上刀三高橋かほる　麻生葭乃
馬場月兎風高見柳骨　佐々木駒人
原史竹田蘆穂　酒井飯山
林田馬行竹内多聞　喜田革郎
橋本二柳子　三好一洲
西垣松雨塚崎松郎　宮内
徳田双柳黒木莢豆　庄田萬よし
太田徹底郎矢田右大臣　森田輝翠
河南放馬太田朝陽松柳川洲馬　關本雅幽

（いろは順）

道頓堀支部　幹事　庄萬よし

天満支部　幹事　原史風

岸和田支部　幹事　太田朝陽

鶴町支部　幹事　闕本雅幽

城南支部　幹事　駒井美の作

六甲支部　幹事　佐々木默闇

淀川支部　幹事　四垣松雨

大阪市南區新戎橋南詰
幹事　庄萬よし

大阪市北區南同心町二丁目一
幹事　原史風

岸和田市下野町四一九
幹事　太田朝陽

大阪市港區鶴町三丁目一一〇
幹事　闕本雅幽

大阪市東區餌差町二二一番地
幹事　駒井美の作

兵庫縣武庫郡六甲苦樂園
幹事　佐々木默闇

大阪市東淀川區南濱町一九四
幹事　四垣松雨

神戸支部　山口支部　豐中支部　東京支部　函館支部　住吉支部　仁川支部

神戸市湊町一丁目電氣局西
幹事　庄萬よし

山口縣山口町石原小路
幹事　柳川洲馬

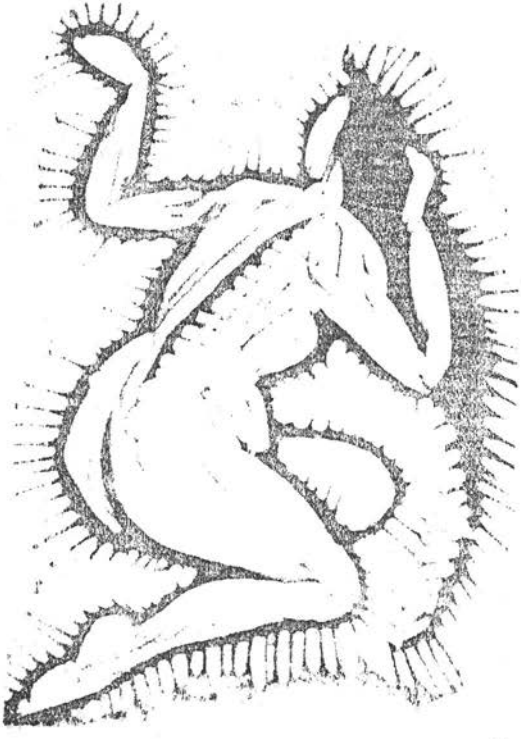
大阪市外豐中桑通二丁目石賀方
幹事　林田馬行

東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
幹事　岩崎柳路

函館市青柳町五〇
幹事　亀井花童子

大阪市住吉區安立町五丁目一二二
幹事　德田双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八
幹事　矢田右大臣



柳壇に今なほ安價なる
享樂派の絶ねないことを悲しむ

（路郎生）

多忙篇

車中にて　麻生路郎

九時四十二分で大阪を立つて東京に向ふ。私は今寢臺の上に横はつてこの原稿をかいてゐるのだ。列車は右に左に頻に搖れる。誰もが寢仕度に忙がしい。

いち早く寢仕度をした私も、この原稿が書けるまでは眠る譯にはいかない。私の最近の生活は今までよりも、より以上に忙しい。それは身體ばかりの意味ではない。僅かの時間を如何に價値あるものとして生活するかといふことが私の頭を絶えず往來するからである。

私はもう三十九である。三十九と云へば芭蕉が正風を起した年である。社會改良家のラスキンだつて徘徊趣味の文學から世界的の文豪とまでなつた。漱石さんだつて皆三十九、四十といふ年からの仕事であつた。

私の菲才をもつて、それ等の人々に比することは餘りに僭越ではあらうが、私は私だけのことをしなければならぬといふことを云ひたいのである。そして私の力のあるだけは充分に伸ばしたいと思つてゐるのである。

たゝへ、自分の淺學であり菲才であることは知つてゐても、自分でなければならないものを少しでも持つてゐるとしたならば、せめてそれだけは殘して置きたいと思つてゐるのである。だから、もう少しの間も愚圖々々してはゐられないといふ心持に絶えず脅かされてゐるのである。

大いに讀まなければならぬ。大いに知らなければならぬ。大いに經驗しなければならぬ。大いに味はなければならぬ。そして夫れ等は相當の奥行のあるものでなければならぬ。それにある深さをもつたものでなければならぬ。

斯うした考へが毎日のやうに私のあたまをなやましてゐるのであるから、私の忙しさは更に一

暦の忙しさを感じずにはゐられないのだ。

むやみに忙しいといふことは人間に取つては多くの場合に不幸である。それは、知ることか經驗することかいふことばかりに追ひ回されて遂に味ふといふことを知らずに人生を消費しつくすからである。私は、いつもさうした人達をあはれんでゐる。そして夫れ等の俗人から離れて川柳に生きてゆける自分の幸福さをしみ〴〵ありがたく思つてゐる。が、いくら川柳に生きてゐるからといふても私には私の生活がある。

私を中心とした私の家族の生活がある。だから仕事としての忙がしさも自然生れて來る譯である。私は常に忙がしい〳〵といひながらも、その忙がしさの中に沒頭して行ける私を、そんなに厭つてはゐない。

世の中には、毎日する事がなくつて弱つてゐる人さへある。そんな人達は多くのひまをもつてゐるからと云つて、どれだけの仕事を世の中に殘してゆけるかは全く疑問であるからである。

私は、どんなに忙がしくても、その忙がしさの中に思案の時間を割りあてずにはおかないのだ。で、なければ、私といふものの存在は全く無意味に終つてしまう。私は常にさう考へてゐる。私は今日、この原稿だけを殘して遂に立たなければならぬほどの忙がしさにあるのである。そして東京へつけば生活のための所要に終始しなければならないのである。それがために『川柳雜誌』へはなんにも書く時間を持たない。如何に忙がしいからと云つてそのまゝにうちすてゝ置けば『川柳雜誌』の發行が遲れることになる。それでは、的にしてゐられる讀者に對してすまない。だから私の忙しさから私の氣持ちだけでも汲んでいただきたいために睡眠時間を割いて何かを書こうとした。讀み返して見れば書いても書かなくてもいゝものであるやうな氣もするが、如何に忙がしいからとて、何かをしよやうとすれば必ず出來るものだといふこと位はうけこれるやうにも思ふ。多くの川柳家が多忙の故をもつて川柳から離れてゆかうとするのを悲しむあまりにつひ斯んなものを書いてしまつたのだ。

今夜はなんだか蒸し暑い晩だ。明日は雨かも知れぬ。（四月二十四日夜）

瞬間のけむりのなかに父の顔

ただ家がころがるばかり旅の空

唐柳短解

蛭子省二

禪家の人がよく話す、德山和尚行つみ學修め、金剛經の註疏をうんと脊負うて、掛茶屋で餅を食はむとした。婆さんが餅も出さずに其荷物は何んであるかと尋ねた後で、金剛經中に過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得とある、餅を求めて何れの心を點心せんとする乎、德山は自らの愚を悟り、悉く經疏を燒いて龍潭に走つた、一夜師家が吹き消した提灯に豁然工夫する所があつたと、病弱なる自分が微力、古句の拔萃を事として居るは愚の骨頂、此道は自ら專門家がある。一本一本を燒棄してせむとする内に『唐柳短解』がある。

岐先生書を寄せられて曰く、『藝術は趣味の鑑詰にして詩は氣分のエキスなり、川柳は其藝術や詩から解放された一大社會的氣分の民衆詩でなくてはならない。現實主義でなくして、超現實主義の一部である、眞に氣分を解、氣分に觸れてゐれば、句なぞない方が遙に立派な人生であるといふことを知つた』と。

（一）頑國の囿方すけん狹しとし

吉原素見の句

孟子梁惠王下篇『齊の宣王問て曰く、文王の囿は方七十里と諸れありや、孟子對へて曰く傳に於て之れあり、曰く是の若く其れ大なる乎、曰く民猶ほ以て小なりとす、曰く寡人の囿は方四十里、民猶ほ以て大なりと爲るは何ぞや、曰く文王の囿は方七十里、芻蕘の者も往き雉兎の者も往き民と之を同じふす、民以て小とするも亦宜べならずや』

（二）引すぎのうしほ易牙に一分やり

吉原吟、うしほは鯛などの肉骨を水にて煮て食鹽を加へたる吸物、易牙は齊の桓公の宦臣、專ら庖厨の事を司る、

『孟子』に口之於味、有同耆也、易牙先得我口之所耆者也、女使口之於味也、其性與人殊、若犬馬之與我不同類也、則天下何耆、皆從易牙之於味也、至於味天下期於易牙、是天下之口相似也、

（三）孫婦人つれて逃げたは德な人

德な人は女德はに通はせたもの故狂臭あり。吳の孫權、甘夫人の死をきき、妹孫夫人を餌として、女德を殺し荆州を略さむと周瑜の計に從ふ、女德は趙雲を從へ孔明が錦の囊に入れし三ケ條の計を受け、吳主に見に孫夫人と婚を結ぶ、建

安十五年春正月朔日、酒宴後祖先の墓に詣ずして夫婦城を出づ、孫權醉さめて之を知り精兵諸將をして追はしむ。

(四)文學盛む梅干が極安し

天下泰平にして兵糧用の梅干、用をなさざる乎、

曹操は口をすくして梅の下知

曹操女德と青梅煮酒論英雄の一節あり、『曹操かぎりなく打笑ひ、我さきに小梅の熟せるを見て、去年張繡を征伐せし時途中水なくして兵皆渴を苦しみければ、心に一計生じ先に梅の林あり早く行き之れをこれと言ひしに兵實と思ひ進む内に口に津を生じて醫せり』と、秀吉にも之れと同じ誤がある。

(五)鼻をおほへば口もないたくみ

鼻と云ひ口と云ふ。其他言葉の用ひ方も狂句式、楚の懷王の夫人を鄭袖といふ、魏の國より王に美人を贈る、王甚だ寵愛す　鄭袖更に妬まず美人を王よりも愛し美衣を與ふ、而して美人に告げ王の御前に列る時は袖にて鼻をかくせ、王は汝の鼻の形を嫌ひ給ふぞやと、美人眞と信じかくなす、王大に疑ふ、鄭袖王に語つて彼の女内々妾に告ぐるに、大王の側に在れば呼息が臭く鼻持ちならぬ故袖にて掩ふと、王怒つて美人の鼻を削る、之れ鄭袖の策なりし也、

(六)かつたいの窓で孔子のよまひごと

伯牛姓は冉、名は耕、魯の人、顏回と俱に德行也、史記に惡疾とある癩のことである、論語雍也第六に伯牛疾あり、子之を問ひ牖より其手を執り曰く、亡之命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也、而有斯疾也。

(七)芹といふものが出來たと桀の民

『送禮を謙して獻芹と云ふ』春秋に『野人芹ヲ美トシテ之ヲ至尊ニ獻ゼント願フ』夏の桀王殷の紂王は暴虐の君主なり。

桀王は諫めるに引事はなし

かんぬきは桀紂の代に始まれり

史記に太宋曰、朕又聞、桀紂帝王也、以匹夫比之、則以爲辱、顏閔匹夫也、以帝王比之、則以爲榮

(八)ありがたさ絜矩の道に塵はなし

大學に是以君子有絜矩之道也、絜は度なり矩は方を爲す所以の器、君子は人心の同じき所を推し人を度りて方正ならしむる道あり。

(九)膽を潰した事のない姜維なり

蜀志『姜維死スル時剖カル、胆斗ノ太サノ如シ』胆の大なるに喩ふ。

(十)獨坐幽篁　若い者若い者

王維字は摩詰、唐の太原の人、九才にして文を巧にす、草隸に工に畫を善くす開元九年進士第一に擢かる、別墅輞川に在り、深く佛を信じ蔬食素衣、妻を失ふて再び娶らず、獨居三十年に及ぶ、詩を賦して樂しむ、母の死後舉げて寺院となす、乾元二年六十一にて卒す、東坡維の詩畫を評し詩中有畫、畫中有詩

山居即事　王維

寂寞掩柴扉　蒼茫對夕暉
人訪門蘿稀　綠竹含新粉
渡頭燈火起　紅蓮落故衣
處々採菱歸

(御願ひ)　此稿三四回續けます誤り多き事と思ひます　朝鮮・光州・蛭子省二宛にて御高敎を希上げます、三月十八日彼岸入り

近作柳樽

麻生路郎選

自殺した人を笑へぬ淋しさに　螢ヶ池
金のある間彼女を喜ばせ　逸錢
妻に似た顔になぐさめられてゐる　同
牛乳と玉子に追つめられて死に　同
れんげ草寝ころんだまま手を伸ばし　同
今さらに仲人口のおそろしく　姫島
樂屋裏乃木將軍へかもなんば　眠聲
しのび泣き月は故郷の空にあり　同
思ひ出の螢もこらず宇治で逢ひ　同
嘘ばかり云つても世間の廣い事　同
赤ん坊へキッスなぎする社會主義　伏見
行末は車掌を望む子を育て　花城
相談に來られて智慧者損をする　同
戎橋見込んだ樣にビラをくれ　同

辻占はしばしその戀まてこある　同
歸鄉して納屋から父に迎へられ　神戸
挨拶の我手に指輪なかりけり　東洋鬼
食ひあいた子供を仲居連れて出る　同
二次會の卑怯が乘つた終電車　同
あをむけば天井白き家にして　大阪
或時の金は殺人力を持ち　靜雲
吸うて吸うて吸うた吸取紙の黑さ　同
何かしら赤さを慕ふ年にして　同
箸二本子供だけのが鉢に浮き　神戸
病氣した服を買うたと仕送らず　隨帖
鳴つたのか晝の一時は過ぎてゐる　同
見せぬ氣で白い横顔見せにけり　同
親となる日も遠からず逢ひ戻り　大阪

同　同
同　悟郎

美少年久留米絣に飽いて來る　同　同
人生もこうであらうか時計店　同　同
寂しさはまだ子供等の歸り來ず　同　同
子へきせる傘に母親袖が濡れ　大阪　屏三呂
カン瓶に水を入れたら可笑しかろ　同　同
冷やかな瞳の前に絹布團　同　同
落ちぶれた俺の世界は土と空　同　同
保証人ですかと暗い顔をする　旭川　志貴南
氣にとめて呉れるなと言ふ強意見　同　同
一徹な家令後妻に煙むがられ　同　同
たいわんの話も出來るあの女　廣島　露斗
眞先に支配人からセルになり　同　同
針仕事ふと讀本をききとがめ　同　同
問題にならぬ弱さで子供死に　大　阪雨樓
しんみりと話をしてる仲仕の手　同　同
兇行は障子の外で待ち切れず　同　同
絶壁を死んだ話をして通り　丸龜　ゆすらん坊
鼻呼吸が亂れて夜の牛が行く　同　同
ペンさきの端へ見てゐる氣が走り　同　同
鑛山に馴れて貯金を忘れかけ　神戸　一狂
父の死を知らず九官馬鹿な聲　同　同
工夫もうダイナマイトに飽いてくる　同　同
死ぬ者へ許すと云はぬ氣強さよ　螢ヶ池　杏三
心から神を見度いと思ふ夕　同　同
寢たまゝで飯食ふ事も耐ね難し　同　同

犬殺し來て町内を寒がらせ　和歌山　無心
丙午貰はせぬのも母の慈悲　同　同
めだか捕る兒に暖さ流れて來　同　同
コバルトの空はつきりと戀心　螢ヶ池　白蝶
忠勤なつもりうるさく犬は吠ね　同　同
嚴格さ軍人にするつもりなり　大阪　春莊
先がない先がないとは父の口　同　同
女房は聞いただけでも腹を立て　大阪　聞路
關東煮後ろは高い塀があり　同　同
自分だけゐるい心もだせず出る　神戸　ひで一
隣人としての愛ではおさまらず　同　同
子に難儀かけては濟まぬ氣の炬燵　大阪　史期
はずかしく半町程も語り來る　同　同
死んだ子の癖を母親フト思ひ　同　白
むしられた鷄の毛に風を見る　同　同
搖り返へす樣に雜踏又動き　松江　喋期
蜜柑賣り意屈さうに一ッ剝ぎ　同　同
卷蒲團背負ふた子供傘をさし　大阪　三平
かはうそのトンビは良いが減つた下駄　同　同
病んでゐる俺に聞える籠の鳥　螢ヶ池　其象
竹こまの音も春らし天王寺　同　同
丸髷は捕れた鼠をもてあまし　大阪　かづ技
此靴の値を考へて靴磨き　同　憲翠
云ふ事が無くて二人は火をいじり　平壤　柳也
薄情で通せば通る浮世にて　神戸　郊村

頑是ない子をすかしてる姉小さし　同　乙鳥
錦着て歸りますよが溝掃除　豐中　案山子
愛人にシャツの汚れを見付られ　大阪　元山
人間じやからと牧師も諦める　大阪府　一圍子
洋服を着て厚司程間に合はず　大阪　柳一
小姑の夫に似たは顔ばかり　殘紅

早見遁助君を悼む

遺言がないかと聞けば辭世の句　螢ヶ池　桃哉
國の母手紙と違ふ家に着き　大阪　春之助
機械場に頭痛のからだ邪魔になり　京都　早苗

居續けのきせるきれいに拭いてあり　伊豫　十四公
又母がないてゐるのか鈴の音　大阪　一文字
女生徒に卷かれて敎師室に入り　神戸　南天榛
臺所へ來て仕出しやは汗を拭き　京都　紫朗
冗談にもせよ夫のある身なり　神戸　志郎
髮結は男優りの歩きよう　大阪　山月
金が有るから色々に氣が變り　山梨　天花
口だけはたやすい樣に云はれて居　大阪　冷笑
借家から通ふ道幅廣く見え　太洋

人生春秋

淺間しく人の一人に生れて來　十字路
月滿てるを目出度と云ふ何事ぞ　馬行
約束事ならでおぎやあと生れ　松郎

□

西瓜摑んで月代がすみ　刀三
母の若さを見上ぐる日あり膝でる　馬行
夕陽に顔を染め塀際に父を待ち　松郎

□

姉の部屋覗いて心明るい日　馬行
ボール手に歸る我家に姉が立ち　同
賑やかな茶の間を一人寢に行く　松郎

兄は遠き學校にあり草を踏む　松郎

□

誘はるゝまゝに夜店を二度廻り　十字路
小遣ひがもうない筈の家にゐず　馬行
忘れるだけに半歲がゝりなり　同
何かしら戀しう風邪の癒り際　松郎
琴の音をきくまいとしてあせるなり　同
ビールほろにがく戀を知りそむ　刀三
背廣着たさにふるさとを出る　同

□

仲裁をするのがいやで風呂へ逃げ　松郎
せめてもの女房に見せる腕つ節　馬行
何事ぞ男盛りを病み續け　十字路
うちの婆がと挨拶のうち　刀三
なんのかんのと後家へ近づく　同

□

隱居でもする氣でゐるへ妾とは　十字路
汗か涙か眼のふち濡れてゐる　松郎

□

遺言のそれから暗くなつたまゝ　馬行
定命とさて云ふものゝ手の細き　十字路
みな何をし御座つたのかと息ぐち　松郎
社會主義も嘘か疊の上で死ぬ　刀三
お釋迦樣貰ろく見わて息を引き　同

本社三月例會

三月三日午後六時
於日本橋倶樂部

本社三月例會が三月三日午後六時より日本橋倶樂部に於て開催いたしました。參會者は左記（五十三名）の諸氏で最後に相撲吟を行ひ主幹路郎氏の短評があり午後十一時盛會裡に散會致しました。（二柳子記）

路郎、芦穂、番外、水府、波郎、莢豆、月兎、ひろし、万よし、醉夢、炭車、塊人、一文字、飯山、乾坤、しげる、のぼる、青影子、山月、夢遊、枝呂、山雨樓、豊春、春莊、眠聲、冷笑、花月、久太郎、突支坊、光太樓、南枝、文久、三平、長人、三次、琴香、がす枝、雅幽、助六、廣賀、柳一、一路、闘路、鳶歩、馬行、刀三、松郎、溪花坊、朝陽、かほる、敏雄、史風、と私

車掌（兼題）　馬行選

車掌反り返りカーブして行く　松郎
腹立ちの車掌名前を聞かれてる　悟郎
いゝ天氣車掌花火を遠くきゝ　十字路
交替の車掌の提げたバスケット　春篁
天はまた此の青年を車掌にし　雅幽
タイピスト嫌な車掌に又出合ひ　番外
交替の車掌人出を聞かされる　南枝
滿員にパンチの音の馴れたもの　万よし
見習を連れた車掌の眞面目なり　廣賀
其よゝで行けと要領いゝ車掌　突支坊
帽だけをかへて車掌の花見なり　文久
家の近所だなと鋏を入れてゐる　番翁
もまれてる氣持で車掌箸を取り　月兎
車掌また通り抜けてる食堂車　青影子
交叉点車掌の短氣見せる　ここ　波郎
滿員に車掌の聲を遠くきゝ　三次
通過又通過車掌と客一人　しげる
車掌今日キルクの草履はいて行き　かほる
明日俺も花見する氣の車掌にて　史風
車掌から見ても淋しい人通り　路郎
ぬかるみへ降ろしておいてバスを切り　飯山
子を連れて車掌へ禮を云ひて降り　同
冗談のやうに車掌は切つて呉れ　枝呂
ちと長いゾボンを車掌氣にしてゐる　同
町名をきかれて車掌ちと困り　琴香
事急に車掌合圖の紐を引き　同
車掌の子車掌の眞似をやつてゐる　山雨樓
車掌また自分の妹と見較べる　同
辨當箱渡すと父になる車掌　芦穂
鋏の音鋏の響車掌馴れ　同
よい酒へ車掌なだめに掛かつてゐる　刀三
風邪引きの車掌一日無理をする　同
（人）反動を車掌心得顔に立ち　南枝
（地）ごとごとと赤電へ車掌殖ゑ　乾坤
（天）國の父に似てゐて車掌きりそこね　路郎
（軸）事故も無く老いゐる母と車掌寢る　馬行
プロレタリヤ位おぼえて車掌也　同

たきに來て通天閣は見上げられ　南枝
新世界の宿へ手當の保護願　ひろし
團體の期待の一つ新世界　醉夢
藝者はつゝ今日も通天閣を拔け　馬行
新世界待つに淋しいところなり　長人
見落した映畫見に來る新世界　一路
新世界喇叭節から夜となり　万よし
肩組んで通天閣の下に居る　しげる
新世界へ久々に來て不良振り　松郎
大阪の宿から見えた新世界　青影子
新世界不良同志が眼で別れ　乾坤
自轉車で寄道もした新世界　莢豆
もちにけと逢ふたと話す新世界　路郎
物凄う瓶のこわれた新世界　のぼる
新世界らしい喧嘩を見て歸り　同
新世界煙草忘れたまま歩き　夢遊
寢てる子を起して見るも新世界　同
新世界二人で來るときたながり　三平
儲かつたまゝに出て來た新世界　同
逢瀬の遠く見て居る新世界　月兎
いゝ月が忘れられてる新世界　同
新世界降りるとビラを呉れる　文久
朝顔呂の姿で逢ふた新世界　同
新世界乞食の戻る道になり　同
(佳)水打つた所が目につく新世界　かほる
(佳)新世界こゝらあたりの三味かなり　塊人
(佳)新世界自轉車で來て押して行る　しげる
(佳)新世界厚司のまゝの連れが出來　同
(佳)新世界拔けると冬が押寄せる　山雨樓
(佳)新世界夜の盛りになつて露　同
(佳)書席で四ッ竹をきく新世界　飯山
(佳)新世界三坪の庭を持つ女將　同
(人)新世界西爪が賣れて夜が更ける　刀三
(地)新世界裏へ廻るとはげてる　馬行
(天)新世界人出遙に三味を持ち　同

苦勞　松郎選

夜逃げ又此處でも苦勞してるなり　夢遊
幼稚園苦勞しさうな顔もなし　万よし
眼に見る苦勞をよそに女將肥に　ひろし
苦勞して揮發の瓶の殖へる事　かほる
その苦勞戸籍の知つた事でなし　塊人
留守中に來る苦勞を聞かされる　枝呂
手の指を見せて苦勞に泣崩れ　山雨樓
苦勞して金貯めて居る高利貸　黑門

苦勞した割につれない支配人　突支坊
苦勞人ですを娘は横で聞き　一路
大阪で別れて苦勞してるなり　聞路
この上の苦勞親類どうする　氣馬行
書置は母に苦勞のさせじまひ　番外
追かけて何かさゝやく苦勞性　しげる
苦勞から苦勞の中に長生し　飯山
ふつと猫いらずがおごけだし　莢豆
先代の苦勞が殘る壁の色　醉夢
苦勞する氣に嬉しさの重なりて　月兎
(佳)美しさ脇息のいる苦勞なり　飯山
(佳)苦勞した手を眺めてる雨のひる　ひろし
(佳)苦勞する程に女房のやせて　路郎
(佳)改心は母の苦勞を聞いて　刀三
(佳)貧しさに苦になる頃をまた孕み　同
(軸)苦勞ばかりてひよつこり死んじま　松郎

品切れ　互選

品切れこいはず流行の柄を見せ　琴香
品切れの品に主人の思ふやう　塊人
品切れと云ふ紙箱のみだれ方　月兎
賣切つた臺へお辭儀を續けて居　雅幽

評判の娘朝日が賣切れる　番外
品切を素手で去ぬのも子供なり　一文字
品切れに二軒も行つた事を云ひ　二柳子
品切れの言葉少なう棚を見せ　刀三
品切れも云はず丁稚を走らせる　光太樓
品切れの後は算盤だけの音　のぼる
品切れへあしたの分が屆くなり　同
品切れにそんな筈がと亭主立ち　南枝
品切れにハ百屋天氣を話すなり　同
品切れを倉まで行つた息で云ひ　山雨樓
品切れをほんとに欲しい姿にて　同
折悪しく品切れの物ばかりへ來　番翁
品切れの品を二度目に狼狽出し　同
品切れへよく注文のある日なり　廣賀
品切れへ無理を云ふのも常得意　同
品切れは世辭を後ろに蹴まづき　乾坤
品切れに馬鹿〳〵しくも草臥れる　同
品切れのそばにおとゞしからの品　飯山
品切れで似たかの品へ目を落し　同
品切れのせめて娘に慰まれ　馬行
品切れの電話素氣ない音で切れ　同
品切れをみくびつて來た二人つれ　松郎
品切れをきいて一べん門を見る　同
羽子板は御覽の通り品が切れ　水府
品切れを丁稚は一つ思ひ出し　同
品切れで向へ這入るとこが見ゑ　路郎
品切れそのまゝそこへ話し込み　同

雜

物干の雫だん〳〵細うなり　春莊
失戀のしつこり濡れて犬と更け　ひろし
蓋こると湯氣高々と上る　二柳子
雨だれを見つめて戀のつのるだ　史風
夜はしん〳〵と産着だけ縫へる　溪花坊
空腹に嬉しい勝手元の湯氣　芦穂
勘忍をして寢つかれぬ婿にして　万よし
陽は高しその寂しさに時計鳴る　刀三
殺生なその近道に鍬をこめ　馬行
山櫻今日の人出を和尚見る　青影子
組合費彼店も暇な樣でした　しげる
針が光つて疊の目が消える　莢豆
從卒は振返へられてちと走り　枝呂
賴まれた人を曲者云へばすみ　飯山
得心の證據盃ふせて立ち　かほる
命日を又忘れてる男親　夢遊

金澤へ

橋本二柳子

△

金澤の川柳大會出席と、私用とを兼ねて私は四月二日の夜、郷里金澤へ、西本三覺氏と共に歸へる事になりました。當夜路郎先生にはわざ〳〵梅田驛まで見送つていただきました。花見時の旅客に交じつて敦賀までは突つ立つたまゝでした。三日午後一時から開催されました金澤の川柳大會の末席を汚した事は私にとつてはほんとうに愉快なことでありました。當日は四十數名の出席者がありました。一昨年路郎先生と金澤で歡迎句會を催して下さつた方々と、再びお目にかゝりましたので十數年住みなれた大阪の句會よりも以上のなつかしみを感じました。そして散會後に殿町の相川樓での懇親會にも、お招きくださつて、窪田銀波樓先生始め安川久流美氏名古屋の森田一二氏、東京の川上三太郎氏外先輩の方々の皆樣から、御厚意を寄せられたことを深く感謝いたして居ります。

旅に櫻

駒井美の作

春風廿四番の春が來た、花と申さば櫻と云ふ又櫻位陽氣な花はない。然し旅に櫻と云ふと同じ櫻にも靜かな或る感じが湧いて來る。一體櫻には土壤の關係から關東地方の方が名木も多く、樹態も一般に大きいが、それに對照する自然の背景に至つては遠く關西に及ばない。神社の櫻寺の櫻奈良附近の神域の中に常磐木と打交つて咲いて居櫻は實に長閑にもゆかしい感じがある。私は往年播州の書寫山に春を尋ねた事が有る。有名な摩尼殿は數年前燒けたが講堂經藏と巨大な建物が風雨に打れて古い板目を露わし、荒廢閑寂に相對して櫻が爛漫と咲いて居るのは詩人ならなく共低徊去り難い氣がする。花は吉野と云ふが其吉野位雜踏する處は無い、寧ろ吉野は新綠葉櫻の候、竹林院あたりに一泊でもすれば本當に落着いた心持が味はへると思ふ。所謂通俗花の名所と呼ぶ場所は其盛時に反つて全く趣が無く成つて仕舞ふ。矢張り花は靜かに見る處に趣が深い、東京も荒川堤小金井と馬鹿騒ぎを見物に行く人は澤山あるが、同じ武藏でも秩父の山境に泌々として春を探る人は少い。

◇

都會の花は朝見のが一番美しい、流石に空氣がしつとりとしてゐる原因で有ろう十數年前青山と云ふ畫家と東京から旅の私と京の祇園の旗亭に燕飲して、夜も

三更と成し快談つきず殆んど夜を徹した事がある。其時若い一妓ともう一人の舞妓が、あす早う清水さんへ櫻を見に御詣りやしまへんかと誘なつた。其舞妓と云ふのが今祇園に美妓として噂の高い富菊と云ふ妓の幼時である。翌朝友人と合せて四人他の者をねこかして階下に降りたが家内の誰も眠つて居る、締切つてある女關で手探りに下駄箱を探すと富菊が、妾のこほこほは鈴が中でちんちん鳴りますよつて直つきに知れます、元と赤い鼻緒のすげた自身の履物を尋ねて闇に一々音を探つて居たのもいかにもおつとりした京の舞妓のあどけなさが有つた表へ出ると やうやう牛乳配達が通る位なもので宵の雨が綺麗に止むでゐた。四人共まだ顏も洗つてゐないが清水についても一軒も茶店が起きてゐない仕方がないので手巾を手拭にして冷たい音羽の龍で朝の顏を皆洗つたのを覺へてゐる。舞臺の石段を上ると今を盛りの花にまだ洛中も洛外

も淡い夢の樣な朝靄の中に靜かに眠つてゐるのが見渡された。そして一人一人明け殘る常夜燈の下につゝましやかな拜禮をしたあと、欄干にもたれて暫く京の春の曉に立ちつくした。歸り路花の下に女達が丁度佇つた處を私が冗談に樹をゆすつたら、時ならぬ花吹雪が其袂や肩に美しく散つた。講家の友人は綺麗だ畵になるゝ笑つたが當人の富菊は、眼に何か這入つたゝ云つて私が眼をふうふう吹いてやつたのは御可笑かつた。丸山の平野家で朝飯を食べた時、清水さんの櫻がまだこないなとこから出ましたねゝ、京風の髪のびんから富菊は花片の二三を優しい手の上に乘せて皆に見せた、之も春の旅の旅情の一つである、佳人健在なりや近況を知らず花春往時を語らば微笑するであらうか。

◇

遲いのは山國の春春である東北北海道もそうで有るが、梅も桃も櫻も一時に咲く其代り眞に百花瞭爛たる有樣である、信州善光寺平附近は櫻もあるが杏花が多い杏は櫻に似て色が淸淡に一層幽婉な花である。櫻ゝ云ひ杏ゝ云ひいづれにしても信濃中夜の春はその艶麗を前に消へ殘る雪を戴いた、堂々たる諸巡峰の展望の大觀は其雄を全國に比を見ない。諸君が一度京洛の花を賞した後更に一年に再度の春を、甲信の地にほしいまゝにするのも面白い事であろう。私は曾つて少年時代長野の親戚のもとに屢々遊むで、歸途列車が輕井澤を下つて上州平野に降りた時櫻の眞盛りを車窓から見て驚いた事がある。同じ汽車の構内でも東京以北は殊に櫻樹を栽植した處が多い。私は櫻が日本の代へ表花で有る以上、日本全國の各驛構内になる可く櫻樹を栽植して欲しい、一般の旅客の眼を樂しませる計りでなく、外來觀光の士をして我國土致る處の春にして降り立つ處、先づ妍爛たる花神に對し陶然ゝする處が必ずあるであろう。

◇

旅の櫻の數々の記憶の中にも別けて格別の覺へを持つものは嶋の櫻なゝ其一つである本土の春にまだ早い三月上旬伊豆の大嶋に渡つた事がある。人が知るが如く伊豆の大嶋は櫻より椿の方が誰にも聞いてゐる、椿は全嶋至る處人家ゝ問はず路ゝ云はず全く多い。其多い深紅な椿に打交つて人に知られない嶋の櫻が淋し氣に咲てゐる、そして嶋の櫻は本土の花より一際白く果敢ない花色である。土地では特に大嶋櫻ゝ呼むでゐる眞紅な椿の落花が嶋の乙女の血の樣に道一杯散りしいてゐる。其紅の上を海風にハラハラゝ嶋櫻の花片がもろく散つてゐる有樣は踏むで行くさへ全く惜しい氣がする。京の小原女に似てゐるのも此嶋の女で有る。好い髪の毛の上に物を戴いて長閑に啼く牛を二頭も三頭も連れて優しい嶋訛りで挨拶をして行く、見上げる嶋の蒼空には悠然ゝ千古の煙を吐く三原山の、俗に御

神火とたゝへられる噴煙が春日永しと計り徐に碧落に溶けて立ち昇つてゐる。紺青の海に圍まれた暖かな嶋の春三原の絶點から海波を起して見る富岳の美觀を物語りたい。實際嶋から見た富士は一種又そこに變つたある感じを受ける事は事實である。しかし同じ伊豆でも下田加茂と奥伊豆の海岸線には、ごうも櫻が少い只現在處を判然と覺へてるないが、谷津溫泉から熱川へ海岸に沿つた山の街道に一ケ處珍らしく、險崖數十丈の海に面して道の左右櫻の老樹數十本に守られてゐる、茶店がある。樹間から新島利島三宅島と伊豆の七島が薄紫に浮いて見へる そしてそこに木造の小さな燈臺が有つた花時は終夜は灯がたよりだが晝は四五里の沖からも美事だ此櫻が船の目印だと、茶店兼此燈臺守の主は童顏をニコニコさせて話した。私は此外洋に漁る荒い漁夫達が櫻を相標に、夕扶村に船を漕歸る心持が優しく其時偲ばれた。毎日御爺さんは退屈で困るでせうネと聞くと、暖かくて眠くて困るだよと椽臺で呑氣にときをつぐる鶏を爺さんは叱つた。山陰線名和神社の櫻も大山を後に海上航行の船の目標になると聞いた事がある。然し反對に古歌に名高い磐城の勿來關なぞは今は花の面影さへなく亭々たる松が潮風にうそぶいてゐるのは、感慨無量である旅に諸國の花をかくこんな事は限りがない終りに日本の櫻樹の巨木の第一と傳へられてゐるのは、山梨縣北巨摩郡新富村中央線日野春下齡車の神代櫻で 高さ十三間周圍六丈推定樹一千八百年其他五百年以上の老木と稱せらるゝは西部では僅か岐阜滋賀の兩縣に一二をあげ得る外前にも述べたが地味風土の關係からか關東以北に悉く多い事をこゝに記して置く。春宵一讀諸彦の多少の興味をひかば筆者も滿足ここゝに擱筆する事にする。

◇

櫻なら櫻で歸る極陰氣　古句
花なら花さ遊びなら遊びさと　同
花なればこそ稀人の坊主持　同

戀の句

林田馬行

○

タオル手に一歩出づれば戀の身の
五六日逢はぬ想ひを封じ込み
悲しくも死に近づいてゆくか戀
帶に吸はれて知らぬ街並
逢へば拳握るばかりの男にて
俯くもたしなみここそ忘るなよ女
命なげ出した女の身體重たし
あなたゝと夢に過ぎゆく
二人して百圓也を借り歩き
別るゝ日想思と見ぬ禮儀あり
働けどゝ尙忘れ得ず
切れ話まさより中座松竹座
胸へ泣かれていつそ賍落
質札へつい眼が屆く腐れ縁
くやしいわねと世間を振り返り
ステッキの兩手動かず男泣き入る
母親は日記を見ての婚さがし
今は父今は母なる一むかし

本社四月例會

四月一日午後六時
於日本橋倶樂部

本社四月例會を一日午後六時から日本橋倶樂部に於て開催した。當日は一日の故かいつもの例會こ多少顔ぶれの變つてゐたのも面白かつた。京都さいころ川柳社の同人六人が大擧して參會されたのも人目を惹いた。

當夜は靜かな晩だつたので思ふ存分句作に親しむ事の出來たのは愉快であつた。

尙輝翠、春篁、山月の諸君から兼題の送句があつた。(馬行記)

路郎、飯山、一路、南枝、山雨樓、紫明、清堂、英月、北嶺、白陽、翠川、放馬、万よし
破傘、突支坊、三平、史朗、聞路、青影子、屏三呂、莢豆、番外、月兎、松雨、かほる、
乾坤、溪花坊、幽香、豐春、春莊、眠聲、冷笑、案山子、助六、定吉と私

雨傘（兼題）　馬行選

雨傘を電話で借りる地位になる　輝翠
雨傘を借つて戻つた宿の庭　春篁
雨傘は重たく虹の美しさ　松雨
傘持つて父を見つける果太鼓　破傘
雨傘の雫に濡れるウインドー　青影子
雨傘のもうこの上は濡れるまゝ　屏三呂
千日へ來て雨傘に穴があき　紫明
雨傘に道頓堀のせばい事　案山子
雨傘を肩に小降りの唄が行き　白陽
雨傘の木戸口までの用事なり　山月

雨傘へ序の用が又ふねる　豐春
雨後の陽へ雨傘べんな向いてる　春莊
その時の氣持になれぬ借つた傘　突支坊
雨傘は濠花踊の歸りなり　史朗
雨傘へ蛙が鳴いて暮れかゝり　莢豆
歌麿の描く雨傘は派手に見せ　溪花坊
宿の傘雪をはたくも嬉しくて　路郎
氣が付いて雨傘の名を見せじ　飯山
雨傘に傘置變へたまゝで雨傘乾いて居　同
傘こ傘此處を拔ければ堺筋　幽香
雨傘の雫にちらこ顔を見せ　同

雨傘へかくされもせぬ女工なり　冷笑
雨傘の中をくゞつて濡れて行き　同
お迎ねに行く雨傘の柄は細く　かほる
土砂降りに傘ひろけたすほめた　同
(人)來にした傘を丁稚は濡れて持ち　乾坤
(地)馬鹿な話だ傘一本を持ち廻り　路郎
(天)氣ちがひを探に廻る傘を差し　飯山
(軸)ぬしのない傘一本の夏休み　馬行
兒がみんな家にる日の傘を干し　同

ごもり互選

女房の方もごもりに氣をいらち　紫明
こつちから半分云はすごもりな　英月
都々逸こなれば涼しいごもりな　莢豆
滿員にごもりも同じ小言なり　聞路
借電話ごもり恐縮してるなり　史朗
誘はれるたびに氣兼なごもりにて　三平
交換手ごもりの聲に腹を立て　北嶺
ステツキでごもりは土を突くはり　青影子
云ひ込んだ話ごもりは手眞似をし　放馬
醉ふて來てごもの露骨な聲にな　一路
同情をされてるごもの若旦那　突支坊
ごもり遂に默りまばたきするばかり　万よし

九官をごもらしてみる麗かさ　破傘
駈けて來たごもり二三度頸を振り　月兎
物云ふにごもりは帶を締め直し　かほる
少しごもつてる方ですと小間使　白陽
もう知つてるとごもりの先を取り　乾坤
ごもられてこつちの話云ひ出せず　清堂
冗談になるとごもりはよく喋り　山雨樓
年頃をごもりのまゝに聲變り　同
皆寄つてごもり一人を說き伏せる　飯山
倒けた子をごもり起してやつたげ　同
云ふ事をゆつくりごもり考へる　南枝
吃りの子顏を見つめて物を云ひ　同
肝心なとこでごもりの云ひつまり　屏三呂
云ひごもる男奇麗に髮を分け　同
ごもつてるうちに女房が見ぬぬふり　馬行
吃りもうあとが云へずに手が動き　同
嬉しさ眼に見せごもは手を握り　路郎
ごもの兒にみんな云はさぬ親心　同

耳打ち　溪花坊選

耳打ちに並ぶ小鉢が二つ三つ　路郎
耳打ちの眉が動いて膝を打ち　馬行
耳うちに下郎大きな腕を組み　紫明
耳打ちをしられてやつと席を立ち　北嶺
耳うちの後で大きく笑ふなり　嶺月
耳打ちに理解の出來る十八九　破傘
耳うちの五月蠅いだけに座をはづし　屏三呂
床柱もう耳うちの譯を知り　万よし
耳うちへ何や何やと若旦那　放馬
耳打ちを尋ね返して叱られる　突支坊
耳うちへ女の知つた事でなし　豐春
耳うちが皆に聞こえて笑ふなり　聞路
耳打ちのまづ橋詰で逢ふとせう　眠聲
耳打ちをしたのが邪魔なとこへ立ち　幽香
耳うちを聞いてる妓の眼の丸さ　山雨樓
耳打ちへうなつく顏の輕いこと　同
耳うちの隣り座敷は醉ふてゐる　史朗
耳うちへ妻君の背はちと低し　同
耳打ちをされぴんの毛を搔き上げる　かほる
耳うちをするに人目が多ほすぎる　同
耳打ちに男は疊見つめてる　飯山
耳うちをしてから二人よそ〳〵し　同
(佳)耳打ちをしてから派手な座に變り　馬行
(佳)耳うちの二人廊下に黑う立ち　青影子
(佳)母の耳打ちひいやりと聽く　莢豆
(佳)耳打ちを重大らしく披露する　乾坤
(佳)耳うちにその表情を見て取られ　同
(軸)耳打ちのあいま〳〵に動く髭　溪花坊

腰　互選

伊達卷の腰引きちぎるまで締め　幽香
頂上がもうそこと云ふ腰を打ち　清堂
あらだを呑んで見る氣の腰を据ゑ　紫明
改心をしたと矢立を腰にさし　北嶺
煙草入腰のあたりを輕く打ち　莢月
町へ來て町の娘らしい腰になり　翠川
置手紙中腰で讀む手が震え　白陽
手拭もきちんと腰へ旅に立ち　眠聲
腰一つひねつて話す相撲好き　聞路
團體の一人鎖へ腰を掛け　一路
氣に向いた事から腰が輕うなり　助六
女房の腰へ小供は無邪氣なり　春莊
弱腰を蹴られて捕り手役が濟み　屏三呂
巾着の新らに可愛い腰を見せ　月兎
三階で映畫へ腰ののびるだけ　三平

浮き腰になつて棒押草臥れる　番外
腰の邊擽う非番の巡査なり　馬行
緋縮緬くの字になつた腰をみせ　破傘
輕業の腰を見つめてゐる若さ　同
お詣りの腰を伸ばさせ連れに逢ひ　乾坤
腰一つ叩いて仕事兎がつき　同
腰一つ二つ叩かせ醉ふてゐる　史朗
震返へりに腰の痛みをちと覺ゑ　同
お婆あさん腰を伸ばして笑つてる　山雨樓
植木屋へ腰をかがめ値をつける　同
中腰になる竹箒速くなり　南枝
腰掛けたここへ老婆がぶら下り　同
遊んでは腰が痛いと親且那　青影子
向けられた腰へ線香の煙が來る　同
腰掛けた石冷ゑ〳〵と秋を知る　飯山
腰掛けてから風呂敷を締め直し　同
腰に手をあてゝ辯士の得意なり　万よし
御見それをしましたがなと腰をのし　同
腰が碎けたやうに娘の舞ひ納め　路郎
死ぬ前の日記に腰の痛むここと　同
腰が痛む腰が痛むと孫を離さず　同

自殺　路郎選

終列車自殺しに行く襟を立て　飯山
自殺だと云ふに母親承知せず　馬行
書置、別なここから死骸出る　放馬
船虫を亂して自殺岩に立ち　月兎
自殺する覺悟もしたと宴を張り　万よし
自殺しに來たに祭の唄を聞く　屏三呂
夕刊は遂に自殺にしてしまひ　幽香
座蒲團のぬくもりを知る自殺なり　かほる
まさか違へは自殺位はするつもり　助六
猫いらずを買つて小さい世間に　清堂

佳

最後まで自殺娘の姿で居　史朗
藥局の灯が自殺には明る過ぎ　かほる
俯いた自殺へ蠅は輪を描き　幽香
死ぬ影にしてはハッキリ砂の上　月兎
自殺せよと生みっぱし子にあらず　屏三呂
落第を苦に病んで死ぬいゝ身分　一路
自殺するほどにはつきりまとまらず　莢豆
燐光のやうに自殺の道の見ゆ　同
(軸)死にゆく身に出雲屋のむし暑し　路郎

豚　互選

豚なんぞ見ずに姉さん先へ行き　眠聲
豚の尾はなのびさうに生えゐる　かほる
追はれてる豚豚豚に突き當り　聞路
屠牛場へ引かれる豚のうめきやう　北嶺
豚のうめきにすつかり暮れる　山雨樓
夕間暮豚の中へも花が散り　翠川
黄昏の中に豚の子淋しがり　三平
先祖より退化したなと豚思ひ　万よし
豚小屋の鼻息荒く夜が更ける　乾坤
赧土のほう〳〵として豚の子等　月兎
年あけの女郎と二人豚を飼ひ　飯山
もうつぶれさな藥家で豚を飼ひ　紫明
豚肉もつり錢も腹掛へ入れ　同
見もしない先から豚を汚ながり　放馬
豚小屋を景色の外に見せられる　同
鞭痛う叩かれ豚のよく肥り　屏三呂
豚の尻ばかりを豚の見て暮し　同
支那料理板場に豚の足が見え　史朗
芋の皮なぞに豚の仔良く肥ゑて　同
豚の鼻泥田の中にある意識　破傘
豚まん〳〵と肥ゑて賣らうよ　同
豚の子のゆくこころまでゆく氣なり　路郎
豚の子は海のひろさに引返し　同

口語體の句

句作上の常套語法（二）

麻生路郎

（二）半口語體の句

半口語體の句とは『それがしも罷歸ると藝子しやれ』の如く口語と、その說明語とで構成された句を云ふのである。そして夫れ等の口語は、その場合、最も適切であり、皮肉であり、奇矯であり、一層興味的であることを必要とする。

かりに、今日の藝者が『それがしも罷歸る』と洒落てみたところで、何等句の上に强い響をもちきたさない。それは何故であるかといふことも知つておかねばならぬ。

——昔の句——

姑の語を藉りた句

邪魔がられますと樒を選りかへし

（評）姑が亡き夫への墓參か。

「いつまでも生きてゐて、若い者に邪魔がられます」と云ひながらも、しきりに樒の大小よしあしを選りかへす心を忘れぬ老人氣質を見よ。人間の汚ないこゝろを見よ。

もつと寐てゞされに嫁は消ねたがり

（評）嫁と姑の仲は遂に走馬燈である。

女房の語を藉りた句

なぜ急に要るエと女房縫はぬなり

（評）亭主、頭を掻き〳〵「それは……その……」とまでは言つたが、眞逆吉原へ行くので要るとは言へず。あゝ辛いかな。

物さしで足らぬ足らぬとたゝいて居

（評）寫生句である。穿ち得て妙。

此暮の顏が見たいと女房いひ

（評）「女房の云つた師走になりにけり」といふ句がある。

間男をするとこ女房こはいけん
（評）痛烈骨を刺す。川柳でなければこゝまで言へぬ。
添乳して棚に鰯がござりやす
（評）一讀平凡にして平凡にあらず。三嘆の外なし。
朝歸り常の身なればいひやせぬ
（評）「常の身なればいひやせぬ」で姙娠であること、しかも臨月であることを言外にあらはした手腕は眞に敬服の外なし。いかにおとなしい女房でも、さもあるべきこと。平蜘蛛のやうにあやまつた亭主の姿が目に見えるではないか。
亭主の語を藉りた句
女湯へ起きた〳〵と抱いて來る
（評）「起きた〳〵」がよく利いてゐるではないか。寫生句の上乘。
ふられたと亭主せつない申譯
（評）「いゝ年をして、もてもしまいに」と女房の鼻息の荒い事
去つた去つたといふけれど逃げたなり
（評）「あんな太いあまつちよに未練はねゝ、すつぱりと三下り半にしてやりました」といふ。逃げられたとは男の口からは言へぬらしい。
母の語を藉りた句
あればかり男かと母邪慳なり
（評）「釣り合はぬは不緣のもとゝいふこともある。さつぱりとあきらめておしまひ。あればかりが男ではあるまいし」とは「こんなよう聞きやと娘をやりたがり」の口であらう。
にしが出ちや赤がむごいと村の母
（評）「にし」は「お前」の田舍言葉。赤は赤ン坊の略語。
今、お前が離緣して戻つては赤ン坊が可哀相だとの意。口語が如何に此の句を活躍せしめてゐかを思へ。
さうであろうであろうと里の母
（評）父と違つて母はすべてが感情的である。わが生んだ娘に何んの無理があらう。一々にうなづく母の愛の深さは一面愚かにも見へるではないか「追ひ出されましたと母へそつといひ」といふ句もある。
又あすも出すわごだます土用干
（評）子供と母親と土用干、光景躍如。「武者ひとり叱られてゐる土用干」といふ句もある。
外へでも寢をれと母は戸を明ける
（評）「外へでも寢をれ」と大きな聲で言ひ放つ母親。それは嫁所の父へ聞かせるための聲である。父と子の板挾みになつた母の採るべき態度はこれより外にはないのである。この息子「母親は勿體ないがだましよい」の口ではなからうか。
其の他の句では
落していもよしかと文をこゝづかり
（評）「落してもよしか」に深い味を見せてゐる。
明日でも躾つてくれろと飛車がなり
（評）たしかに口語體のコツをのみこんだ作家の句である。式亭三馬の「浮世床」の人物を髣髴せしめるではないか。
右々と麥から首を出していひ
（評）道はこゝで再び二つに岐れてゐる。旅人はそこまで來て立ちどまる。振りかへれば、一二町うしろの麥畑から、さつき道を敎へてくれた百姓が首をつき出して「右々」と手をふりながら叫んでゐる。（つゞく）

私の知人の川柳觀

（一）川柳界では、傳統派と革新派が對立して混沌たる狀態にあります。此の際川柳家以外の川柳觀を聞くものも、いろ〳〵な意味に於て、興味の深いことであらうと思ひますその方法としては川柳に、相當理解のある知名の方々に社から、直接お願ひして、御高見を聞かせていただくのもよからうとは存じますが、それは又の機會に讓りまして、此の度は社會のあらゆる方面から川柳觀を覓めて見たい と思ひますのであなたのお存じの方から、川柳に對する御意見をお聞きさいまして、お知らせを願ひますそれから（二）知人の方の職業、肩書、年齢（幾つ位）等を附記しておいてさい若しお邊支がなければ、住所氏名まで知らしていただきます。こういふ質問に對して次の如き回答を得ました。

○　下　關　前田非不矣

（一）武門政事の壓迫が川柳を產んだ。卽ち其押へ付られた自分を第三者の自分から訊して强ひて展開の天地へ漢搔き出さんとして是を藝術化したのは川柳だと思ふ。故に川柳を作るに世相の裏面又は側面から見た皮相の表現卽ち柳味がなくてはならぬ。近來の川柳を見るに餘り化粧に凝るために立派ではあるが、其生地を沒却された感がある革新も必要ではあるが柳味は何處までも發揮してほしい。

（二）下關市大坪日の出町　藤井米藏（四十八歳）

○　平　壤　福島柳也

（一）川柳は正義であり眞理でありたい唯生活を表はすだけでは不可である。皮肉の奥に正義があり、諧謔の中に眞理を藏してゐなくちや駄目だ。而して客觀兩觀共に俳境を冒すべからずである。

（二）新聞通信印刷業、藤野馥雄（五十二歳）

○　伏　見　池上花城

（一）川上に花一つ咲く童詰劇　水府

『なる程ね』

煙突の上から墜ちて死にました　一二

『これはなんですか？』

『へエー、子供が作つたのですか』

川柳です。

（二）產婆、山本松子（三十八歳）

○　大　連　佐々木三福

（一）若い時分には、短歌も作りホトトギス派の俳句も試みたが此の歳で戀だの涙だのの短歌でもなく、餘りに世智辛い現代の空氣を餘り掛け離れた俳句でも物足らぬから結局やるならば、稍現代の世層と調和のとれた川柳道に入つてみたい位の希望は持つてゐる。否現代も當地新聞柳壇の句には仲々興味を持つてみてゐる次第だが、此の考へは强ら俺一人の意

見ではないと信ずる。折角川柳道のために御奮闘を祈る。

（一）滿鐵經理課購買主任、大連市壹岐町二八ノ三、奥田直（四十歳）

○　神戸　中澤濁水

（一）私は繪のスケッチを十七文字にうまく表現したものが川柳だと思ひます。皮肉なり諧謔なり諷刺なり事相の心核なりを面白く現はす所に川柳の生命があると思ふ。川柳は入り易くして入り難い謂ひ換へれば川柳には極入し難い難關があると同時に又馴じみ易い心易さがあると思ふ。そこが現代所謂川柳家の簇出多くして大家の寥々たる所以かと思ふ。

（二）小學校訓導、神戸市石井町三丁目九九、武藏雷洲（三十五歳）

○　岡山　平井村夫

（一）文飾なく天地大自然を唄ふ可きものと考へます。

『不景氣に馴れて娘の薄化粧』

（二）某醫學士

○　御影　長崎柳秀

（一）各人分相應の作養をなし人の云はんとして云ひ得ず、住して其處を知らざる人間眞情の機微を捕へ其眞如を現せば川柳の域に達したるものと云ふべし。作者以外に一人なりとも之に感ずるあらば良し多からば可なり。一賢の意を滿たんとするよりも衆庶の人生を慰むるあらん川柳を望みたし。この道の普及せん事を願ふ人にて普通人が讀みて、何の事か解らぬ物を作り、川柳をしてやたらに困難なるものと思はしめ、或は各自の城壁の中に佚する者なくんば幸と申すべし。

（二）醫學士、大阪市北區堂島裏町、長谷川成一（三十四歳）

○　神戸　大山一狂

（一）大體元來より古川柳の持つ情緒を非常に禮讃してゐます。革新派の稱する個人の個性も尊いが川柳味のある傳統川柳の方が進むべき道ではないかと思ひます。

（二）神戸市荒田町三丁目四五ノ一五二大山たか子（二〇歳）

○　大阪　西村山月

（A）川柳とは、笑ひながら作り、作つたものを見て又笑ふ、斯ふした遊戯的のものぢやないでしようか。

（近江銀行江洲高宮支店員、辻市次郎（二十四歳）

（B）川柳は俳句よりも實生活に觸れてゐるから讀んでゐても愉快である雜誌にしたつて、一番先にこの川柳欄を見る。

（會社員、大連市外小野田セメント會社二號池田中方、西邑順一（二十六歳）

○　螢ヶ池　酒井技呂

（一）『枝呂兄先日はお手紙を頂き有難う存じました。其後私も負けぬ氣で三句程作つてみましたが、仲々むつかしいにしても吾々凡感な人間には作れ相にも思はれません。けれども雜誌等の懸賞川柳をみますと『こんな物なら自分にも作れる』と言ふ樣な氣がします（間略）『はいり易すく、上達し難い』と言はれた貴兄の言葉が始めて作つた川柳の三句によりて敎ゆられた樣に思ひます（間略）私

の友達にもすゝめて作らして居ります。先づは御返信まで早々……』以上は小生に宛た知人のレターの一部です。以て『私の知人の川柳觀』のお答に代ゐます。

（二）會社員　大阪市N生（二十五歳）

○　大　阪　小田夢路

中央大學を出て創作なごこも多少趣味を持つてゐる桑原こ云ふ三十一歳になる友人がありますが、川柳の眞價は何うも解らないこ云つてのけます。時々柳誌を送つてやるので『敎へてほしいが、やりかけるこ樂しみなもんだらうネ』こ答へるのが關の山です。

○　豐　中　林田馬行

僕の知己こ云つても僕より十も年上の人だ、以前は呉服渡世をして御座つたが性來の稚氣が禍してこの頃は主勤め。この人なか〳〵愉快な人でちよい〳〵冠句の會へ行く、京都の人である。そして理屈の少し位は云ふ、この人の川柳觀がおもしろい『川柳は矢つ張り遊びだね、そら冠句よりはいゝよ、普遍する可能性はあるね。けご僕は冠句だつて川柳だつて同じだよ、こんなものよりこの頃食ふ方に忙しいからね』隨分思ひ切つた事を云ふ男である。この男僕の不在中によく僕の書棚を荒す荒すこ云ふよりも汽車中の無聊を醫する爲に僕の書棚から無斷失敬して行くのだ。だから川柳の本や川柳の雜誌は讀んでゐる。句も相當讀んでゐる『小遣ひがあるかこ云へばお辭儀をし』松郎、は巧いねこほめて呉れたそのほか後の葉柳の『人間はいゝがこ云ふにこゞめこき』路郎『グーの音も出ぬ人間が子を拵へ』半文錢『正直がなんの足しにもならず死に』路郎なごに共鳴した處を見るこ全くの門外漢でもなささうである。

○　大　阪　北山悟郎

そう〳〵此の間も宅が、くつ〳〵笑つてゐるのでしよう。なにかこ思へば夕刊に載つてゐる川柳『成金を煙に捲いた流行妓』を見て愉快に堪へられないこいふ風にしてゐるぢやありませんか。

妾にすればそんな川柳なんかには、少しも共鳴點を見出されないの。安價な諷刺に過ぎないわ。それに宅つたら實際低級なのよ、あら冗談ぢやなくつてよ、

川柳！さあごう言たらいゝでしよう。妾もね時々作つてみるけれご仲々素的なテーマが見付からないの、俳句より至難ですつて、或はそうかも知れないわ『妾の癖をぢつこみつめる兒よ』こんなのはごう、いけなくつて、あらあらいやだわよ。奥さんは犬才だなんて、なにも御馳走は出ない事よ。『若い燕切符を買つて渡されある』まあ素的だわ。『晩酌にお父さんに死が近づくか』之は又こても深刻ね。

つまり斯ふなんでしよう。自分の氣持なり、氣持ぢやおかしいわね、一つの感情なり事實を一定のリズムによりより藝術的に纒めやうこいふのぢやなくつて

（冊才位の某會社重役夫人の言葉そのまゝ）

神戸新開地だより

萬よし生

花の二週間を川柳短册展のために籠城花便りは紙上の寫眞に見るのみ。

三月廿日に依頼狀を出して今月五日に陳列し終るまでに好意と苦心との結晶が約五百點、締切後についたのとで六百點

東京　劍花坊、信子、久良岐、雀郎、太郎丸、荷十、花菱の諸氏以下九十九點

横濱　卯木、餘念坊氏以下十二點

大阪　蹈郎、水府、南北、五葉、寛汀溪花坊氏以下二百二十三點

神戸　紋太、東洋鬼、番翁、夢遊氏以下百三十九點

大連　濤明、若蛙氏以下三十一點

田邊　楓林氏以下五十一點

地方　久流美、京之助氏以下三十八點

席せまくして全部を陳列し能はず同一人は重ねて列べる有樣

でも神戸新聞、又新日報、大朝大毎の神戸版は親切に紙上に照會して下さつたし、神戸では紋太氏を初め、めだま、拍子木、覆面の同人各位の御援助と、まだ川柳を知らない紳士淑女までにも宣傳し得た事を喜びます。

十七日には川柳雜誌社神戸句會を開きました。出席者四十六名、短册陳列中の十八疊立錐の餘地もありませんでした。

（次號發表の神戸句會參照）

二十日盛會裡に閉會するまでの出品者各位の好意と神戸各吟社の厚志を深く感謝致します。

短册展雜感

文字の巧拙に拘らず、誰れ憚らず短册に、色紙に個性か伸びたのを見ると未知の先輩柳友各位に會ふた氣がします。

先輩各位の句に接し、登錄し、陳列して居る間に十數回熟讀する爲、さながら先輩へ直接指導を受ける樣な親しみを感じ、且つ肺腑を突く苦心談が聞けます。

川柳の何たるかは議論では有ませぬ。川柳そのものが日本人そのものであることを適確に會得しました。

平安朝以來發達し來つた毛筆が、如何に萬年筆全盛の現代にも濕ほひを持つてるかは、新時代の川柳家も歴史を無視して進むのは嘘だといふ裏書になるやうです。

米國には金あれども文なく、日本には文あれども金なしといふたのが本當だとも思ひます。いづれが最後の勝利を得るかは面白い問題です。

扇港の街の夜半過ぎ下駄音稀に港よりの二聲續く小蒸氣の汽笛は夜警の音の樣に親しみと感興を投げて呉れます。

募集句

細引

白石維想樓選

荷を締めるだけ細引の手にこだわ　一文字
細引ののた打ち廻る荷ごしらえ　吐霧樓
細引の親切一つ忘られず　坊
細引を締める力は手に餘り　柳也
細引のゆるんだまゝで荷物着き　聞路
細引を張つて火事場の燃る事　越浪
天窓の細引ひけば夜の幕　殘紅
細引がぐるぐを卷て荷が出來る　逸錢
細引を締めて母親手を痛め　憲翠
細引の先で猿公稼いでる　一團子
細引の一筋で絶へる命なり　柳秀
細引きを抜けて天華の美しさ　白鷗
細引を引くとお猿は背にくる　笛呂
細引へこれも〳〵と渡される　三平
細引でくゝられお七品が良し　史朗
細引が切れるまで役に立つたこと　山雨樓

家賃

吉川啞人選

い、家こほめて家賃をきゝて見る　一文子
改築に家賃三割高くなり　三次
三月分今日大家が座り込み　天花
變屈の親爺家賃を取りに來る　朝陽
家賃をば聞いて家中見直され　聞路
心配の一つ家賃が又上り　龍堂
家賃にて食べてる後家の健かさ　万よし
家賃たゞ亭主包みのまゝ投げる　善坊
見晴しがよいが家賃にちと思案　必利劍
店の間も貸して家賃を安う住み　拔天
造作を家賃ついでに頼むなり　越浪
後德と家賃の安い家に住み　琴香
家賃やら利子やら叔父のこまかすぎ　山雨樓
家主には家主の理屈有は有　眞沙哉
四月越し溜まる家賃に雨がもり　殘紅
まだ壁のかわかぬ家賃きいてる　逸錢
家賃丈けと云ふ女房の手内職　案山子
家賃だけ揚ればよいと貰店　突支坊
嚴重に子供家賃を持たせられ　杏三
家主さんへもうこの上は延されず　太洋
お妾を置くに家賃を値切つてる　志郎
貸してやるやうな積りの先家賃　一團子

川柳家の戸籍調べ

□係　馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(75)駒井美の作

(一)駒井憲(二)美の作(劇評家、森ほのほ)がこんな名を附けたのです(三)ホトトギス派の俳句に以前一時竹人と云ふ名を用ひましたが今でも「旅行雜誌」などに何か書く時使ひます(四)大阪市東區餌差町二二一(五)明治廿三年拾二月十三日生(六)こゝ暫くやめてゐますが花作りなのですほのほ氏の句に曰く「園長は文藝談もする男」(七)武玉川あたりの句が好きです(八)素人商賣人にかゝはらず一昔前位までは東京は東京、上方は上方とそれ〴〵特有な情緒がありましたが、段々此頃わけて滅茶〳〵になつて行くのを悲しみます。兎も角しかし女の眞實の美しさは廿四五からで所謂人としての巧味の出て來るのも其時代と思ひます(九)これと申してありません。たまに皆が賞めて呉れる句が或は佳いのかも知れません(一〇)藝術的基礎や匂ひがあるものなら凡て舊き

親しさは同じ家賃の壁一重　柳也
家賃さへ取れば心は鬼でなし　千鳥
ぐつすりと寢てると家主思ふ也　白鷗
米代と家賃に追われ乍ら生き　柳秀
家賃より勝手を女心配し　かづ枝
家賃をば無視した如く雨がもり　笛呂
家主もう家賃不納をもてあまし　憲翠
月給の三分の一家賃なり　郊村
安家賃盥で受ける日が續き　光路
十圓の家賃交換手と母と　史朗
家賃だけ聞いて見もせず行ったまい　山月
家賃だけ大きな金で持つてゆき　藤原
壯麗に驚き家賃に驚き　吐露樓
米代と家賃を拂ふ丈けに生き　同
(人)妾宅は露路の家賃をせしめてる　無心
(地)家賃だけ日に賣れるかさ　親旦那
(天)それはそれこれは家賃と律義者　眠聲
(軸)家賃だけ利子で拂へる暮し向き　啞人

蜂

朝陽選

○死んでゐる蜂動いてる風があり　一文字
蜂の子の花から花へ育てられ　双柳
南洋の蜂は俺だと手をひろげ　豐麿
花園の蜂一匹が邪魔になり　越浪
蜜蜂は稼ぎためては横ぎられ　志郎
巣を取れば蜂二三匹ついて落ち　杏三
花折つた罰か手酷い蜂の劍　殘紅
蜂の巣をつゝいた一人逃げのび　山雨樓
戸迷ふた蜂に見惚れる麗かさ　喜一
蜜蜂が異人屋敷に巣を造り　善坊
なぎなたを使ふ身振りで蜂を追ひ　必利劍
庭先をどこから來たか蜂が飛び　聞路
一坪の庭も蜜蜂見のがさず　柳也
菜の花の甘さを蜂が群れて來る　無心

太田朝陽
橋本二柳子　共選

蜂去つた花へ蝶々來てとまり　史朗
蜂の巣へそつと突き出す長い竿　乙鳥
花嫁の張物板へ蜂が來る　郊村
蜂の巣を子供は恐い氣でつゝき　憲翠
待つ間瀕死の蜂をみいるなり　太洋
診察に蜂にさゝれた腕を見せ　柳秀
蜂の巣の近くに花が咲き誇り　逸錢
迷ひ蜂靜かな部屋をかき廻し　同
蜂の巣の一匹留守居役のやう　天花
蜂の巣の横に野ばらが美しい　同
(佳)お針子をあつと云はせて蜂が逃げ　眠聲
(佳)滿開に蜂は忙しい姿なり　史朗
(佳)追跡の光景になる蜂の群　吐露樓
(佳)滿開を先に知るあの蜂が飛び　山月
(佳)布團干す小春の屋根に蜂たち　同

新しきを問はず何でも面白味を持つてゐます。そうかと思へばたとへば考古學のやうな理學的な話を聞くのも好きです。北海道の果てから九州の南端迄滿三年間殆んど家に歸らず暇に任せて跋渉して知人間を驚かせた時代があります。變つた處では銃獵、是はお馴染の川村花菱や長田秀雄などは東京でのお仲間の一人です(一一)有ります。男の子が一人(一二)冷たい人(一三)日露戰爭頃々良岐の「川柳梗概」などと云ふ本を森東魚と云ふ二人その頃下谷の上野の東文館と云ふ本屋に買ひに行つたものです。東魚の親類で私の育つた家は江戸に十三代から傳つたと云ふ舊家でした。そして私は廿四五から先づ關西に暮したと申してもよいのです。

(76)　山川紫明

(一)山川清太郎(二)紫明(三)紅の家みどり(四)京、六波羅樋口小路(五)明治廿五年二月十五日(六)滝匠(七)多過ぎて書けません(八)東京で云ふ下町風、日本髪に黒襟の女てなものですか(九)ぼち〳〵作ります(一〇)旅行の外は一杯呑んで京極へ毎夜の如く出掛ける事位(一一)有(一二)利己主義といやらしい姿の動物大小共(一三)十年程に成ります。

(77) 中川霧太

(一)中川正夫(二)霧太(三)なし(四)神戸市花隈町椙元紋太方(五)明治卅八年十一月七日生(六)鷄卵販賣(七)「父の眼に骨まで腐るものと見ね」「黒枠の中の他人に朝の乳」一殘されしものは女の酒ばかり」以上日東氏(八)多分に赤い色で包まれた女でさへあれば(九)「三味線と女とだけの馬車の客」霧太(一〇)勝負事に似たものならば總べて(一一)自分を魅きつける女であれば配偶者と同樣とも考へる(一二)菊池寛(一三)大正十一年頃。

(78) 牛窓屏三呂

(一)牛窓平三郎(二)屏三呂(三)なし(四)大阪市浪速區稻荷町二丁目九六八地(五)明治卅一年八月七日生(六)正米(七)澤山あります。總して暗い深刻味の句が好きです。本年の貴誌では「炭ついで炭ついで女をうらむ」路郎・が好きな句の一つです八)袷時分の羽織を着ない丸髷の女(九)まだありません(一〇)哥澤(但し聽くだけ)撞球 目下やめてゐる)劇、爪彈(一一)なし(一二)斷髪の女、巧利的な瞳(一三)大正十三年の春。大阪時事柳壇へ投句したのが初めです。

(79) 堀内靜雲

(一)堀内旦(二)靜雲(三)綠星子(四)大阪市東區南新町二丁目十七(五)明治四十一

(軸)竹竿に何をと云ふと蜂が逃げ　一聲

○　一柳子選

密蜂のうなりにねむい午後一時　一文字
蜂の巣へつかへて頭さゝれたり　双柳
悪戯をするので蜂はさすのなり　琴香
應接間蜂迷ひ込む暖さ　杏二
蜂の巣の近くに花が咲きほこり　逸錢
蜂の尻重たい樣に飛んでゐる　聞路
蜂去つた花へ蝶蝶が來てとまり　史朗
密蜂が花から花へ餌をあさる　乙鳥
切れかゝる芙蓉から蜂ふいに飛び　憲翠
逆襲のやうに蜂荒れ狂ひ　柳秀
花園の蜂一匹が邪魔になり　越浪
眞青な空へ密蜂飛び上り　同
蜂の巣をつゝいた一人逃げのび　山雨樓
蜂には蜂の考へあつて飛び　同

各地柳壇

松郎編

◇萬よし川柳（第廿四回）

粕汁　椙元紋太選

粕汁は先づ色取りを褒められる　杏三
掛け下ろしする粕汁へ戻つて來　廣賀
粕汁の膳へ氣兼ねな女客　乾坤
粕汁に醉ふたと頼母子掛けにる　眠聲
粕汁の好きな男の子を案じ　山美
蓋を取るまでに粕汁云ひ當てる　大門
粕汁の所へ寒い顔をみせ　同
(人)粕汁のことはあぐらの夜となる　大門
(地)粕汁に醉ひ臺所で褌が冷ね　山美
(天)粕汁と飯との錢を置いて出る　飯山

次回題「皮肉」五句　林田馬行氏選
五月二十日〆切

大阪市南區新戎橋南詰万よし宛

◇紅茶の後（北陽くれないニテ）

命なき水の再び戻り來ず　刀三
水カメのその靜けさを毛蟲の死　同
音たてゝ水の迯行く走り元　馬行
はつとしてコップの水に座を正す　同
器遁れてさゝやき合へる水　松郎
醉ざめの水を許したのごの佛さま　同

◇神戸万よし偶會　万よし報

道樂をとつ捕まへて家へ置き　紋太
道樂がやんたと思や弱いなり　同
襯衣を着ぬ姿を伯父に見離され　同
あの妓もあの妓も知つてゐる夜　同
おのれから云ふ道樂は初手のこと　隨帖

此のほかにまだ道樂があると云ふ　同
道樂は初めのほどが面白し　万よし
道樂もあつて養子の世が榮ゑ　同

◇梅田偶會（三月卅日）眠聲報

棧橋で波のあつたを云ひ添へる　二柳子
見物と云ふて手荷物預けてゐる　同
燈臺の赤い光りが波となり　案山子
洋行の手荷物座敷中ひろげ　同
小波をわけて二人のボート行き　冷笑
物足らぬ筈手荷物を忘れかけ　同
波の音まだ心配で寢つかれず　眠聲
手荷物へも一つ母の好きなもの　同

◇かほる居偶會（四月十六日夜）

かほる報

約束は犯もさらずに田に稼ぎ　飯山
工面して約束の日を待つでゐる　同
約束に少し遲れた女連れ　二柳子
約束に行けば寢卷のまゝでゐる　同
約束に女の方は醉ふてゐる　かほる
約束を守り床屋で自惚れる　同
たんぽぽにお伊勢參りの續く事　飯山
白足袋で來てたんぽぽの花もとし　同
股引の裾にたんぽぽ馬鹿にされ　二柳子
下駄の花緒にたんぽぽついてゐる　同
たんぽぽの黃色ら咲いて今日も暮れ　かほる
たんぽぽの牛のよだれに濡られる　同

◇安治川小集（四月十二日夜）

飯山報

町内が月掛で行く運動會　金澤生
さゝいなる受取とるも勤人　一文字
出棺を路次口で待つ會葬者　同
町内は女房の方がよく見知り　同
家計帳勤人らしい遣い振　越浪
路次を出て冷たい風につき當り　同
今嫁が來る町内の人だかり　同
勤人月給を云ふものでなし　泗水
諸事儉約この町内も貼つてゐる　同
盜人を町内中が追かける　同
終點を少し歩くと假事務所　飯山
つむじ風終點らしう吹いてゐる　同
顏まけがして行商は路次を出る　同
町内であれも一升いける口　同

◇偶會（四月二十七日）

寫眞を中に仲人夫婦箸をとり　馬行
蓄音機一臺賣るに騷がしき　同
寫眞もどへ返り他人になりたがり　同
妹は浪子の型で寫させる刀　三
檢束の寫眞は裾が亂れて居　同
逢ひにきたのに蓄音機が鳴り　同

年七月廿一日生（六）大阪銀行集會所に勤務（七）數に切れません（八）所謂下町風の女（九）製造中（一〇）撞球（百二十位但し自稱（一一）もう十年程したら出來る筈（一二）「耳隱しお前は耳が無いのかい」靜雲、是で解りませう（一三）大正十三年六月「大大阪」の小集に出席したのが專門誌を知つた始めです、それまでは新聞柳壇で默句つてゐました。

（80）岩崎柳路

（一）岩崎武夫（二）柳路（三）なし（四）東京市芝區愛宕町一ノ一六大成社内（五）年齡三十一歳（六）特種電氣器具製作販賣業（七）「云ひ過ぎた日は庭も掃き水も打ち」路郎「拜まれて女は泊る氣にもなり」路郎「殺された夢から深くなつて行き」松郎、その他紋太さんの句、古川柳（八）薄化粧した女學生風の美人、但し無口で背の高い方（九）自信の句としての發表でなく我が家庭上のスケッチで初心時代の「初戀は今の妻とは笑はせる」現在では「寢顏まで世帶染みてる女房なり」（一〇）好きな映畫は二三度見に行く、劍劇、落語、（一一）ワイフ廿七歳、男兒十一歳八歳四歳だん〳〵責任が重くなる斗り（一二）大掃除、宿替、意地惡い巡査（一三）大正十年八月、日々柳壇へ投句が始め、大正十一年二月五日本町橋商品陳列所聚樂館の大阪日々川柳大會が始めて行つた句會。

句評

井上刀三
林田馬行
塚崎松郎

本文は三人が寄つて批評し合あつたのでなく豫め句を提出しておいて各々筆を執つたものです。だから所々に個々の批評が重復してゐる點もありますが、却つて興味のあることゝ思ひます。

犬起きてゐるばつかりに果されず　隨帖

松郎　先づ下五の何を果されなかつたのか、と云ふ疑問に伴ふてこの句の想が不明であるといふ感じがする。それでぢつと深く考へて見ると『盜人』の句ではないか位にしか浮ばない。其他の解としては、不良兒の家出其他の行動ででもあらうか。兎に角僕には右の如き解釋が一定せないのだから、これといふ評が出來ない。もし盜人の解としてなれば、どこかに言ひ足らぬ點があり淡泊過ぎて共鳴點が尠い。尙『盜人』といふ事を聯想させてあるがこれは文學的聯想でなく一の謎に屬すべきものぢやないかと思ふ。

馬行　大摑みに全部說明し終つた句には魅力がない。この意味で僕はこの句に贊意を表する事は出來ない。下五果されずと云ふ說明的な文字を排して盜人の動作を詠じたら多少內容が活躍するだらうとは思ふが、我々は犬と云へばすぐ泥棒を聯想せなければならないやうな無駄から早く脫れる事に努めなければならない。そして、犬なり泥棒の皮相にとゞまる觀察を捨てゝ內面的に獨創的な境地を發見したいものである。

刀三　僕は今泥棒になつてみる。繪の樣な靜けさに眠つてゐる宏大な屋敷、僕はこれから決行せんとする仕事に輕い戰慄を覺ゑて、忍る〳〵生垣から中の樣子を覗つたのだ。その時突如、けたゝましい番犬の咆哮を喫する、刹那飛び上らんばかりに驚いた僕は、計畫に對する極度の失望を覺ゑて忌々しくも其處を立ち去らんとするのだ。その時『犬居るばつかりに果されず』と僕が口誦むこせよ。此塚合僕

は、あまりにも遲鈍な泥棒ではなからうか。僕はあまりにも泥棒なる惡業に對して無神經であり、僕の泥棒稼業はあまりにも遊戯的であらねばならぬ。

刀三　園栗の木の下で弟を憶ふ　東洋鬼

幼時の追憶を表すに、この手法は既に常套的であるかも知れない。けれども、ぢん栗の木の下を捉へたところ既に作者の仕合せであらう。柿の木の下に於ける樂しい思ひ出ではなく、勿論桃の木の下に於ける甘い追憶ではない。作者の云はんとする追憶のぢん栗の木の下によつて遺憾なく躍動せる事よ。これを單なる作者の空想的收穫と見るのは、既にこの句を誤るもの也。この篤棒な讃辭を與ふる事に僕は吝でないが、これ丈けの想ひを捉へた作者のおろそかにも『ぢん栗の木の下で弟を憶ふ』とべラ〳〵言つてしまつた事を惜む。

馬行　斯うした境地は童話や小説でよく讀まされる。夢二の繪にでもありさうな圖である。そうした事とは別にこの句を見る時、作者は餘り樂に作りすぎてゐる。何等苦しんだ跡が見ない。僕はこの内容を單なる感傷的な作品に終らせたくない氣持がする。我々の進むべき道は單なるセンチメタリズムではない筈である。

僕はたゞ斯うした境地を歩む作者の未來を買ひたい。

松郎　輕く一句にまとめてある點を買ふ。想こしては、かゝる追憶のある人はより共鳴し、こう云ふ經驗のない人、詩集なごを讀んだ人達には左程の價値に見ないだらう。

園結をしてゐるやうなバナヽなり　靜雲

松郎　バナヽの色、幾本かがつらなりたるまゝ無造作に置かれたバナヽの、他の果物との比較上等にも……さもあらん。強て調子の難を云へばないでもない。バナヽなり、は『芭蕉の實』としたい。

馬行　單なるバナナの見方にすぎない。それだけに平凡だと云へば云へるが無難である。園結と云ふ二字に依つて活きてゐる句であるが。このごろ一部の川柳家に斯うした誇張の語句に興味を感じ亂用する傾向のあるのは苦々しい事である。それは文字の遊戯に過ぎないからである。

刀三　バナナの鈴なりを園結してゐると巧に描寫した事のみがこの句の價値と生命を裏書したにすぎないが、靜物としてのバナナに人生が加味しようたつて無理な事なのだからバナナの句としては先ず上乘『うまい事を言ひましたね』位で愉快にパスさせましよう。

出世すりやするだけ俺が怖からう　雅幽

刀三　『裏切つたお前よ　嘗ては俺を苦しめたお前達よ、俺は出生をしたのだぜ、嘆ましくはないかい。過去が恥しくないかい。さても憐れむべきお前達よ』これは甚だ勝手な推定かも知れないが、斯く論じ來つたならば、怖からうに尠くとも矛盾を認むる事が出來るであろう。尙斯ふした表現必ずしもよい

こは云はないが、べラ〳〵こ言つてしまつたのこは遂ひ作者の苦しんだ跡がはつきり見ゐて愉快ではないか。

馬　行　初めこの句を讀んだ時、ごうした場合を詠んだのであらうかに考へさせられた。然し暫く見つめてゐるこ、はゝん成程こうなづかれる。そうして可成り複雜な内容を持つてゐる句である事に氣づく。然し斯うした純主觀で押通すことは考へものである。この句にもなぜか物足らない弱さを發見する。もとより此句の持つ内容に比較しての話である。技巧の練磨はかゝる場合に於てこそ必要である。

松　郎　複雜な主觀がよくまとまつてゐて、深刻な痛快味な句である。僕にも斯うした境地は常に心に抱いてゐる。今この句を得て更に欽快こするこころである。『この寢顏短氣な事は思ふまい』玩月、こ共に特に僕の忘れ得ざる句であらう。

女房の甲味に着て出た寒い朝　白　蝶

馬　行　輕い所を採る。無難な句ではあるが何だか物足らぬ只是だけかこ云つた氣持に見舞はれる。

句の表面に現れてゐる以外に内容を持つた句でないからかも知れぬ。この句からいろ〳〵聯想をたくましくしたが纏まつたものが出て來なかつた。

松　郎　感興のない句である。說明、報告的で只川柳の調子がこゝなふてゐるこいふのみ。今もしこの句の解釋をほどこせば嫌味な點ばかりであらう。

刀　三　この句はなんだか思はせ振りたつぷりの樣で本氣になつて批評でもしようものなら一杯喰はされそうで憂鬱だ。こんな恐怖感に襲はれてゐるこ、ごう褒めてよいか、ごうけちを付けてよいか判らなくなる。作者には甚だ失敬かも知れないが僕未だ女房を知らず、呪んや斯うしたデリケートな女房觀を解せざるの愚を詫びて、不覺にも兜を脫いでおく。

人の兒の哀れおちよはの細い帶　屏　三呂

刀　三　おちよほをみるこ僕は何時も暗い氣持になる。おちよほ自身は案外平氣なのだらうけれども、それが餘計に慘めに思はれて、僕のおちよほ觀は憂鬱そのものである。

が故にこの句の境地所謂内容に對しては、充分共鳴出來得るが人の兒の哀れが如何にも安價なセンチメンタルで厭味である。

一層のこと、こつてしまつたならなごゝ殘念がる程これが厭だ。作者の聰明な眼は、紅燈綠酒の巷にこのいたいけな小婢を發見し、その哀れさをその帶にまで求めたが、人の兒の哀れなごの臆病な小細工が、折角のデザインを滅茶苦茶にしてしまつた。

馬　行　人の兒の哀れこ云つたやうな作者の思想の概念をそのまゝ何の濾過も加へずに表現した事を惜む。おちよほの運命や人生を詠むにはもう少し力強いものを要求したい。上八の失敗を重ねて惜む。

松　郎　おちよほの帶を見ての作者の感じはよくよめるが、今少し叙法に意を用ひられたかつた。人の兒の哀れ、細い帶、の餘り使ひ古されたのでなく、作者獨自の新表現に成功されたら現代人のかへり見ないこういふ想が躍如こして詩的價値を高

からしめるであらう。

冬が見えるが　何も見當らず　莢　豆

松　郎　問題になる句であらう。刀三、馬行君はこの句をどう解釋をして批評するかを興味としたい。概念は評者のみながら同じ處をつかむだらうがはつきり解するとなると各觀方が違ふ事と思ふ。でこの句は、ある晩秋の感慨で、もう冬が近づいて來た寒くなつて來る。俺はもうぐづ〳〵して居れない、けれども現在自分の希望には何等の光明をも與へられない、行先を思へばたゞ暗い感じがする。こいつた寂しい心情を表現した句であると觀たい。失職の句と觀てもよい。尙句の想は詮じ詰ると事件がはつきりしない。僕は感じの句として頂戴する。一歩誤れば淺薄な革新の一派（とでもいはうか）の句となる。

刀　三　滿目蕭條たる冬の風物、南に面した小ひなたに陽のいろをぢつとみつめてゐると、せめても愛い喜びを見付ける事が出來るであらうけれど、霜枯れた大根の葉を吹く冷たい風、牛が乾いた藁を踏む心細い音色さへも淋しい冬に何を求むる事が出來ようぞ。そは夕日を脊に受けて枯野を何處ともなく漂泊ふ旅人の心ではなからうか。この句に對して煩はしい詮索はしたくない私は、作者の淡泊に言ひ切つた輕卒さにすら共鳴出來るのだ。

馬　行　川柳とは斯く斯くのものであると定義を下すほど川柳はちつぽけなものでないと僕は信ずる。この意味で莢豆君の作品に刺戟されてゐる人が尠くはなからう。

この句など君の近來の心境を心おきなく物語つてゐる斗りでなく文藝的作品としても立派なものである。この塲合の破調も至極自然であつて內容にしつくり合つてゐる。

斯くして作家としての莢豆は刻々完成の域に近づきつゝある。

社長ふとぶつきらぼうがお氣に入り　萬よし

刀　三　社長といふ特權階級の人間の氣儘と磊落さが充分表れてゐて面白い。これは社長に限らず世間によくある事柄だけに誰しもが頷く事の出來る句であらう。唯社長ふとのふがこの塲合聊か不自然の樣な氣がせぬでもない。作者にしたつてこのふとに對しては必ずや不愉快な事であらうと思ふ。

馬　行　想ふこと古く表現も常套的手段であつて何等創造の跡がない。この塲合のふとの二字は無駄ごころかこの句をして混亂に陷らしめてゐた。作者は努力の人である旣て斯うした境地から飛び出すことは云ふまでもない。

松　郎　お氣に入りがごうかと思ふ。まあ水平線のところに見ておく。

附言　この句の上五『社長ふと』や『お氣に入り』や其他この句の想に對する修辭と調子について述べたいことが浮んだので原稿紙二枚餘りに書いてみたが、後へいろ〳〵な研究問題に接してゐるので、限りある本欄よりも五月九日の本社柳壇會に提出したので結果を次號にでも發表したいと思つて右の樣な短評に止めておいた。句に熱心な方は一人でも多く來月の柳壇會に出席したいほしい。必ず參考になると思ふ。（完）

川柳自在

竹馬居

今の文士で川柳の選をさせ得る人は、やはり里見弴氏だらう古顔では岡鬼太郎氏、先生はあちこちで實際選を擔任して居らるゝ。川柳の批判をして貰ひ度いと思はしめるはヨネ野口氏で、幸ひパンフレットなぞを出したから望ましい。古顔では村上浪六氏、所が實は浪六先生には『川柳自在うき世の裏表』と云ふ今から十二年前に一篇の人間學書を出版されてある。『當世五人男』なぞの感化を中學の初めに可なり深刻に受けた自分は、半白の今も多大の敬意を表して居る。『川柳自在』は當時求めて友人に贈つた。馬行氏が活字本を集めて居らるこの事に、不圖讀むでみたく返事のはしに認めたのが緣となつた。昔手にした記憶失せ新に接する思ひがある。

好むで昔の出版物のアラ拾ひめいた事をするのではないが、先生にして川柳五分、狂句五分の解釋推賞に纏つて居るのは全く摩訶不思議である。

馬鹿な事犬を猫だと三味線屋

『輕妙滑脫の極質に面白い名句で川柳子の奇驚ここに遺憾なく現はれて居る』とか。

穴の中いはゆるこれが秦の闇

『これも面白い驚句で』なぞは、大は附和雷同し無ねる

琴の爪袂にあつた流れ賣

をお妾として解釋され

江戸の中央へうろたへも二人

を『田舍から手に手をとつて出て來た駈落ちもの、男女を寫倒した川柳なれど、何んの的もなく只この東京が猫も杓子も出世の出來る處所と心得てくる今日の人間にも』なぞ、川柳專門家でないから誤つておいでになるのは致し方がありますまい。

然し先生の評は讀み來り讀み去つて、其横説竪説、麤言細語、遂に一句の第一義諦川柳に歸して居るのは嬉しい限りである。

『人事いよいよ複雜なる後世に金錢なるものの勢力を喋々するに及ばない、つまり金錢を仇敵の如く恐れて糞土の如く卑しむ奴は、その萬錢に自己の人格守操を破らるゝ奴である』と、凛然棒喝され

た後へ

風鈴の下に一文世を遁れ

洵に熱惱を除去して清涼が得られるではないか。然も『寧ろ阿賭物の眼中にない禪宗が盛んに行はれた鎌倉時代、その當時の必要に擇ばれて、最も天下有用の材に擧げられたものは誰である。……青砥左衛門藤綱といふ氏素性の低い錢勘定の高い男である……川柳にこれを唄うて曰

ついでに蜆も見てたもれ滑川

『天下通用の錢を探すばかりでない。その手で蜆も取れとは面白い』有錢無錢乃至拜金と云ひ清倉と云ふ。相對觀念のものだ。青山元不動、白雲自去來、風鈴の一文と青砥の一文と何にを商量してゐるのだ。

先生曰く『近頃は飴細工の如く俄に女の權力が膨脹して、殆んど田來の復仇的かと思はるほどに凄じい。つまり野郎に甘いところがあつて、べろりと舐められた次弟でもあらうが、もはや男尊女卑といふ昔の蠻風を脱し、仰せらずとも大切に敬愛しかけた今日、どうか萬事お手柔かに願ひたい。

間男をするよと女房強意見

『しかし餘り睦じ過ぎし、いはゆる情死の月賦、相方の衛生に害を及ぼすやうでは困る——女房と相談をして義理を欠き——これでは猶更困り入る』と、此の『間男』吟は自分の好きなもの一つである。間男をする程の女房を拜み倒し得ない樣では我見偏見の執着當體に過ぎぬ。和尚が檀家から金を集め木尊佛を買ひに都へ出た。長持をもつて歸山したから信徒皆して蓋を開けると、楊氏の生れ變りのやうな花魁が會釋して歩きだした。和尚は、皆さん木佛金佛と違つて多くの男共を手玉に取つた酢いも甘いもかみわけた生佛樣だ、サアお拜まつしやいと。

ごの嘘がほんの夫婦になろうやらである。先生は此句を『ごの嘘がほんのめっとになるだらう』として『まづ十中の八九皆これ一家の難を救ふためで、泣顔があのくらゐたと女衒いひ、そもそも賣られて家を出る時、身も世もあられぬ哀別離苦の血の涙……その孝女も竟には遊里の自然に馴れて、知らず識らずの間に天晴れ眞ッ赤な嘘を眞實らしくいふやうになるとすれば、猶ほ以て人類悲慘の極であるこの觀察は案外牛凡ではなからうか、釋尊は正淫を許し邪淫を排したと云ふが、自分は其の眞意を知らぬ。正邪とはそも何んぞやだ。柳は綠花は紅、絶對は一如のもの、看板は畵餅である。澁柿は甘柿だ。身受けして吳れる奴と、口を拭つて夫婦氣取となり、人生苦乎樂乎と寢込むでしまふところに大滿腹の川柳味が包藏されるではないか。

禿さへ桃色はごの嘘はつき

—春季皇靈祭、雨降る日—

川柳塔

○　塚崎松郎

白酒一口二口女房の若し
君も隨分變つたネこれは妻だよ
親類へ言葉を合はしごくばかり
夜汽車に搖られ父こいふ意識
馬鹿はまだ歸らず鎌を研いでゐる
姦婦殺されて佛になりぞうか神樣今この子に死なれては

○　喜田飯山

三月二十一日長男耕太郎逝く（一句）

をさなきものを悼みつゝ炭をつぐ
親切は不斷着のまゝ悔みに來
貰ふても淋しきものは御靈前
柳行李若い燕の方が持ち
朝歸りかまごの煙りもたいなし
鄕關を出る三等の待合所
二十日ほど家出してゐたたけのこと
家出して青年團が一人減り

○　岩崎柳路

エンブレスオブで成功して歸り
ソプラノを母は呆れた顏で聽き
生花の水を替へてゐるいゝ娘
しつけ糸他所の女が取つて呉れ
桃畑牛のわらんじ落ちてあり

○　黑木莢豆

妹の葉てた袂糞が赤かつた
神樣もうれしいことはきかされず
妹の箒のあとをみつけたり
キス一つワイングラスを出づるなり
稼ぐよ稼ぐよぢや左樣なら
夢かしらあちらこちらで笛が鳴る

○　松本助六

熱をこる父の手堅く兒にさわり
何氣なしに銚子を振つて叱られる
御寮人家の飾りにされて居て
長煙管仔犬を叩く氣の强さ
百人の中の頭の小男よ
職場着を汚く見るも公休日

○　伊藤彦造

物思ひ机の本に風がありちと氣取り氣味に歩いてけつまづき

○　井上刀三

冷飯も嬉しさあ〳〵と云ふ

神様へ小蜂が飛んで花が咲く

質をおほにて今日もさほりぬ

胸をはださけて人妻に戀やある

可愛い子だものとは母のありがたし

巡禮の濁らない眼を佛様

○　酒井駒人

初戀の頃の空地に家が建ち

まだ戀をしてゐた頃に讀んだ本

失業さへせねば盗みもせまいもの

○　林田馬行

食はねばならぬ事を入れての議論なり

鼈へ來れば鼈に呑まれまいと身構ひ

中折の古きも舊師らしかりき

死んだ友數にて友と別れたり

醫者の眞似して笑はせるほど癒り

いつ歸つても母親は飯を云ひ

○　森田輝翠

冷やかな心よ石疊にも似て

自動車で來た甲斐もなく待たされる

菜の花の中に戀人まだ癒ひず

花見酒雲雀の聲も聞きされず

親に似た癖は死金をまた使ひ

○　庄万よし

これで來ぬ方が惡いと宣傳し

すかたんの讃辭淋しきものゝうら

氣狂ひの沙汰へ女房は妥協する

四海波花嫁頭下げ過ぎる

○　太田朝陽

引越の荷物へ續く病上り

來た文も見ず引越の二三日

文使ひに手鞠唄から一人拔け

○　橋本二柳子

家があり田があり水の音がする

山からの水水槽を越ゐてゐる

巣を探す雀ふくらんだやうに見ゐ

冬の金澤

犀川の水突當り當り行く

編輯後記

◈春の憂鬱が私をなやましてゐる。反逆的なこゝろが、それに油をそゝぐ。なんだか總てのものを毀はしてしまひたいやうな、なやましさである。

◈柳の葉が、日に日に濃くなつてゆく。そして長く長く伸びてゆく。燃ゆるやうなその青さへ、このごろの私のこゝろをいらいらさせる。

◈四月の柳壇は寄りが悪るかつた。それは祭日に休んで日曜に休めなかつた人が多かつたからだ。中には二日の休みを利用して花の遍路に出た人もあつたからだ。柳談會は松郎を先頭に、杵屋七美佐、馬行、松雨の四人、杵屋の三味をききながら柳談にふけつた。杵屋が歸つてから松郎、馬行、松雨と僕とで呑む呑むとなると刀三の來ないのは淋びしい。來ると云つてゐた莢豆も來ぬ。最近に讀んだアイルランドの戯曲の話をする。夜に入つて革郎が來た。しばらくして革郎を殘して外の連中が引きあげて行つた。革郎と入れ違ひに莢豆が來た。莢豆は十二時過ぎまで話し込んで行つた。人數こそ少くなかつたが、うれしい日だつた。

▲本社五月例會

◇時　日　四日午後六時より

◇場　所　大阪市南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入南側　日本橋倶樂部　電話南三四二四番

◇兼　題　「單衣」　三句

◇會　費　三拾錢

初心者の來會を歡迎す

▲遲日莊柳談會

◇日　記　九日午後一時から十時まで

◇場　所　阪神沿線鳴尾　廉生路郎方

◇批評吟　一句持參のこと

◇會　費　不要

◈朝陽の一家は四月三日に二女武子孃を加へた。朝陽は祝盃ばかり擧げてゐるだらう。

◈松郎と刀三が引越した、大阪市此花區上福島北一丁目七八高橋佐藏方。

◈東京の柳路も千葉の駒人も無事だ。

◈二柳子は二日から八日まで郷里金澤へ出かけた。そして金澤の川柳大會へ出席した。刀三も十日間程丹波へ歸つてゐた。

◈万よしは神戸で、全國川柳家短冊展覽會を開ひた。おそらく、この種の會ではレコードを破つたことと思ふ。會期中に川柳雜誌社神戸句會を開ひた。詳細は次號で發表するが、和歌山縣田邊の堀楓林氏も見ゐて、すこぶる盛會だつた。

◈大正日日が柳壇を設けた。選は馬行が担當することになつた。

◈飯田が生れたばかしの長男を失つた。句會で逢つたらほんとにしよげてゐた。私も子を亡くした經驗が二回ある。ほんとに、あじきなさを感じてゐる事であらう。同情に堪ゐぬ。

◈十一日には本誌印刷所の運動會があつた。出席者は八十人程、同人では卯之助、松郎、馬行、刀三、かほる、松雨、二柳子、革郎と僕。みんな所主の好意を感謝した。松雨の福引、かほるの踊は共に白熱的歡迎をうけた。

◈酒井枝呂君は大阪市北區山崎町七四地資生堂方へ　◈中井山美君は神戸市元町五丁目一二五片山呉服店方へ　◈久世一路君は大阪市港區雞波島二丁目四十二番地へ　◈加古しげる君は姫路市野里鍛治町三友館前へ　◈假本秀次郎君は大阪市東淀川區新高町八番地ノ一へ移轉　◈東京市小石川區白山前町六一高橋方中野秀太郎君は中野欽司と改名され

◈四月二十三日夜、岸澤屋支店に宿泊中の北海道の川柳家神尾三休氏を二柳子と共に訪れ、花童子に寄書を送りました。同氏の句に曰く「花童子のもてた話の島の内」

◈私は四月二十四日の夜行で再び東上することになりました。

（路郎生）

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第七號課題

五月十日締切
（各題二十句以內）

▼職人　森東魚選
▼僧　矢田右大臣選
▼齒醫者　關本雅幽　西垣松雨　共選

第三卷第八號課題

六月十日締切
（各題二十句以內）

▼頓服　安川久流美選
▼牛　塚崎松郎選
▼青春　中川霧太　井上刀三　共選

毎號募集

▼近作柳樽（三十句以內）　麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）　塚崎松郎編
▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　參拾錢
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓（共郵稅）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十五年四月廿五日印刷
大正十五年五月一日發行

第三卷第五號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸一郎

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋　岳文堂　和正堂
（東京）東條（京都）三宅（神戸）米田
（金澤）石井（松任）三須（函館）石探

社主藤堂氏の
ための惡文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焰をあげて、あとであんなことを云はればモット本が賣れたらうにと後悔をるとこでろなど仲々うれしいすおぢさんある。なんでも社會に貢献するために本屋をはじめたのだといふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおぢさんを滿足させて下さい。

＝路　郎　生＝

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

水了軒のお辨當

旅行に…集會に

山をほめ海をたゝへてお辨當

大阪梅田驛前

水了軒

電話（北六四〇番）（北一八三四番）

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十五年四月二十五日印刷　大正十五年五月一日發行

第三卷　第五號　（第二十八號）

定價金參拾錢

天然果汁の合成に成効せる
唯一の權威を持つ

ミツ矢
レモラ

レモラ程自然の味を持つ飲料はありません、天然の果汁天然の鑛泉を以て理想的に出來た最新の飲料です、
英京ロンドンに於ける斯界の大家の研究室から生れたレモラ是非御試飲下さる樣お勸めします

日本麥酒鑛泉株式會社